

止まらない汚染水と進む海洋汚染、現状と対策

農学部支部 片山 知史さん

大津波による人間の生活域の破壊と沿岸海域の大規模攪乱、そして大量のガレキや砂泥の流入から、2年半が経ちました。一部の砂浜浅海域や岩礁域、藻場・干潟を除くと、海（漁場環境）と生物（資源）は早々に回復したと判断されます。福島県の漁業者には「放射能さえ無ければ、苦勞しながらでも漁業・養殖を再開できたのに」というやり場のない怒りが満ちています。また、地下水問題を含めて、途方もなく大きな敵を前にして無力感を植え付けられているという状況です。

福島県沿岸海域において、放射性物質は現在水中にはほとんど存在せず、海底に砂泥とともに溜まっている状態です（ただし、汚染

地下水からの漏出の影響は、まだ全く整理されていない）。海洋生物については、当初（2011年4～5月）はあらゆる生物種で基準値を超えるような高い値が検出されていましたが、2011年8月以降は、底魚の一部を除くと減少傾向にあるといえます。特に貝類やイカ・タコ類を中心に、水深150m以上の海域では試験操業によって漁獲が開始されています。しかし底魚では種間の差異のみならず、種内でも大きく値が異なります（例えば一網内の同種個体でセシウム濃度の個体差が大きい）。しかし、そのメカニズムが全くわかっていません。食品としての水産物の問題については、「多くの海洋生物をモニタ

リングし、安全性PRする」というのが現在の国や県、そして漁業者の対応です。しかしながら、入口管理だけでは消費者の安心を得ることはできないことは皆さんも感じていることと察します。変動性が大きく、しかも地域（田畑）を単位としたチェックや全量検査ができない水産物の安全管理には困難を伴います。ですが、この物質放射線物質の問題を、微量有害物質による魚介類汚染として問題認識し、水産物・食品管理システムを省庁を超えて検討すべきだと考えます。物質の「希釈」と意識の「風化」を期待することは、問題の先送りではないのか。はないでしょうか。

2013年11月30日、12月1日、大阪大学医学部を会場に17大学59名が参加しました。50年の歴史がある集会です。分科会は病院支部をもっと大きくしたい思いで「魅力ある組織づくり」に参加しました。各大学それぞれに悩みがあり似ている状況もあり。中間層が

震災後の慶明丸を訪ねる

09年5月、コアで取材に行った南三陸町にある農漁家レストラン慶明丸は、「3.11大震災」で全て流されてしまいました。ところが昨年5月に「慶明丸の浮き球が北米アラスカに漂着し、店主の三浦さきさんのもとに戻ってきたのを機に、4月から開店した」とのテレビ放送があり、再度新鮮な海の幸をいただきに伺いました。

11月4日の南三陸町は大型トラックが往来する工事現場みたく、復興には程遠い状況でした。新装開店した慶明丸では、三浦さんの震災当時の話や浮き球確認のためアラスカまでいった話を聞きながら、新鮮な海鮮どんぶりなどをいただきました。



三浦さんを囲んで

元気に働いている三浦さんを見て応援したくなりました。皆さんもぜひ訪ねてみてください。

医大懇

組合に入っていてよかったです！

2013年11月30日、12月1日、大阪大学医学部を会場に17大学59名が参加しました。50年の歴史がある集会です。分科会は病院支部をもっと大きくしたい思いで「魅力ある組織づくり」に参加しました。各大学それぞれに悩みがあり似ている状況もあり。中間層が

いないことも共通しています。しかし、秋田大、名大では20代の支那部長が誕生するなど頼もしい話題でした。組合に入っていて良かったと思える、入っていることがいいはずだと思える活動を作っていくことが重要であること、自分の考えとも一致することでした。記念講演は「特定行為に係る看護師の研修制度を考える」と題して、神戸市立大学の林千冬先生の講演でした。元々、医師不足解消のために考え出されたことであり、「正体は看護師の役割拡大という名の業務シフト」「看護本来の役割の探求と看護の可視化」が必要、看護師としての軸足をどこに置くかが重要であることを話されました。同感の思いです。（病院支部 北村裕子さん）